

講演 1

「セックス — 語りたい？ 語れない？」

人文科学研究所教授 田中 雅一

1 はじめに

人文科学研究所の田中雅一と申します。私は過去 20 年間ほどセックスとは一体何なのかということを考えてきました。まだまだ途中ですけれども、この機会にセックスについて皆さんと一緒に考え、この講演会の共通のテーマである学問のつながりについてお話ができれば、と思います。

私のタイトルですが、これは必ず「セックス」。それ自体はあまり意味がないのですが、副題が「語りたい？ 語れない？」ということで、これは皆さんの気持ち、というよりは、私自身の心情と考えていただきたいと思います。事務局からどういうタイトルにするのかと問われたときに、まさに私自身の気持ちとして「セックス、語りたい。けども、語れない」という意味で考えついたタイトルです。

さて、今からちょうど 10 年前に読売新聞社から『性の風景』というルポが公開されました。これは、読売新聞紙上に連載されていた記事をまとめたものです。そこでは、つぎのような主張がなされています(73 ページ)。性は秘められたものだ。タブーになるからこそ魅力的だと考える人も多い。しかし、雑誌のヘアヌードが氾濫するなど商業的な性表現が進む一方で、日常的に性を語る文化が育っていない、というのも現実である、と。多分この矛盾は現在でも認められると思われます。語れない、というのは、個人の問題ではなく、社会の風潮とも言えます。

私がいつもあっけらかんと大っぴらに性について語っているかというと、決してそうではありません。今回も益川先生と一緒に、一緒にと言うと変ですけど、同じポスターに名前が出るということで、本来ならば家族に自慢できるはずなんですけど、私のタイトルがちょっと、やっぱり家族には見せられないなと思ひまして、ひた隠しにしていました。18 歳と 22 歳になる二人の息子がいますが、子供にもあまり教えたくない。それから、私自身の親は昭和 2 年と昭和 5 年生まれなんですけれども、親にもやはり知らせたくない、と思って何も伝えないでいました。しかし、読売新聞の販売力のおかげといえますが、この講演会の連載記事が掲載されますと、近所の購読者の方からこういう記事が載っているけど、お宅の旦那さんでしょ、とか言われて、家の者にも知られてしまいました。今日は下の子供が来たいと言っていたんですけども、来ないでほしいと断りました。そういう感じですから、私自身もほんとうは性についてあまり語りたくない。とくに家族の者と語りたくないというのが実情です。私は、セックスについては決して進んでいるとか、大っぴらだとか、特殊だということではないのです。

2 3 月 15 日——宗教とセックス

さて、本題に入りたいと思いますが、まず 2 つのキーワードを提案したいと思います。どちらも日にちです。この 2 つの日をちょっと考えながらお話を進めていきたいと思っています。

ひとつは今日の日付でもある 3 月 14 日、これは若い人にとっては非常に重要な期日ですがご存知でしょ

うか。バレンタインデーとペアになっている日ですね。ホワイトデーと
いってバレンタインデーのときに女性から贈り物をもらった男性の方が
女性に対してお返しをする日。もうひとつは3月15日。

3月15日というのはあしたですね。あしたは、今日いらしている名
古屋の方の中にはご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、愛知県
小牧市にある田縣神社の豊年祭が開催される日です。田縣神社には御
歳神（みとしのかみ）と玉姫命（たまひめのみこと）が祭られていて、
子宝、安産、恋愛成就、縁結び、夫婦円満に効験がある神社として信
仰されています。この日に大男茎形（おおおわせがた）という名前の
男根が奉納されます。これは、男性の性器、それも直径60センチで
2メートル余のヒノキ材でできていて、宮大工の方が毎年つくります。
それを厄年に当たる男性たちが担いで祈願します。その写真とビデオ
を今からお見せしたいと思います。写真は1995年と1996年に
撮影したものです。



(写真1)



(写真2)



(写真4)

写真1は神社の建物のひとつですが、そ
の中に写真2のような男根型の奉納物が祭
られています。それ以外にも非常に小さな男
根がたくさんあるのが分かります。写真
3が毎年新しくつくられるものです。一年
前に奉納されたものはどうなるのかという
と、近隣のお店などに引き取られていきま
す。



(写真3)

私もそういう場所に行ったことがありますけど、そのときはきしめん屋さんでした。
ちゃんと店内に飾られています（写真4）。こういうものを見ながらきしめんを
食べておいしいかどうか、というのはまた別の話だと思いますけどね。

写真5の絵馬をみてください。ここにも男根があしらわれているのがわかります。写真6は境内で売ら
れている縁起もののお札です。これは、私も持っていますけど、よく見
ますと、実際に男根の形をした彫り物みたいなものがぶらさがっていま
す。こういう写真をお見せすると、境内は男根だらけじゃないかと思わ
れるかもしれませんが、そのとおりです。写真7では、上の方にぶらさ
がっているものは単なる鈴ではなくて男根の形をしたものですね。写真



(写真5)



(写真6)



(写真7)

8の石塔も男根を模しています。

写真9がお祭りの一部です。これが新し



(写真8)



(写真 9)



(写真 10)

人形以外に、もうひとつ有名なことがあります。お祭りにはなっていないですが、特に婦人病や性に関係するような、あるいは生殖に関係するような病気を治してくれる神社ということで有名です。また子宝祈願でも有名です。中でもユニークなのは、自分の使っていた下着やブラジャーなどをビニール袋に入れて、ビニール袋に名前を書いたり、あるいは絵馬と一緒に奉納したりする行為です。授産所ではあたらしい下着が売られています。これを身に付けると、効験があるのだそうです。写真 13 は、本殿の裏にある建物（末社）です。ちょっと見にくいと思いますが、ビニール袋に吊されているものが、実は女性の下着です。この格子戸にはたくさんの絵馬が捧げられていますね。この建物の中には、たくさんの男根の奉納物が見られます（写真 14）。



(写真 13)



(写真 14)

い奉納物です。

写真 10 もお祭りの写真ですが、今度は若い女性たちが非常に大事に、子供を抱えるような形をして小さな男根を抱いて（といっても人間の平均より大きいですが）、神社の周りを巡ります。皆さん、非常に楽しそうにやっているように見えますね。

さて、小牧市の田縣神社についてはこれくらいにして、ほかの事例に移ります。私は 90 年代からこういうお祭りをできるだけ見たいと思っています。いろいろな回っています。

私の出身地の近くにある和歌山県加太の淡島神社（写真 11）は 3 月 3 日のひな流し、人形流しというのが有名です。ここには、家庭で簡単に処分できない人形がたくさん納められています。写真 12 は、日々の処分を待つ人形たちです。境内のいたるところにこのようにたくさん



(写真 11)



(写真 12)

のいたるところにこのようにたくさん

同じような事例をもうひとつ紹介したいと思います。それは、若宮八幡宮という川崎市にある神社で、その境内には金山神社があります。この神社では「かなまら祭」というお祭りが、4 月に開催されますが、ここでも男根をみんなで担いで町を練り歩きます（写真 15）。先ほどの田縣神社などはもうちょっと厳かな感じがするんですけども、こちらは



(写真 15)

もっとカーニバルのような楽しさを醸し出しています。この神社では、ちょうどエイズが日本にもはやり出したときに、うちはエイズに効くんだ、と半分冗談で主張し始めていました。お猿がありますね。見ざる、聞かざる、言わざるというやつ。このお猿にあと 2 つ付け足して、見ざる、聞かざる、言わざる、せざる、させざるというのを作りました。「せざる」の方は、要は前の方を押さえてい

るんです。「させざる」の方は後ろの方を押さえている。当時は男性同性愛者の不治の病だという考えが強かったこともあります。そういうお猿を売り出したりして、まさに楽しくやろうというようところがよく分かります。



(写真 16)



(写真 17)

このお祭りには、女装する男性たちと外国人の仮装という2種類の異装者が見られます。外国人の仮装というのは、鎧兜を着たり着物を着る場合です(写真16)。これはこの神社が貸し出しています。着物を借りて着ている女性が男根の上に座っていますね(写真17)。写真18は私ですが、隣の外国人女性が驚いています。また、写真15では亀井戸にある女装クラブのひとたちが神輿を担いでいます。こういう神輿が町を練り歩きます。そして、一般の参加者が途中で写真などを



(写真 18)

撮ります(写真19)。



(写真 19)

この御神輿の巡行の前に境内で大根を男性の性器あるいは女性の性器の形に彫るんです。それを巡行のあとに競りにかけます(写真20)。わりと有名人も来ますので、有名人の彫った大根が場合によっては2,000円とか3,000円で売られるということです。そして、こんな大根を持って踊ったりします。

3 問いかける

ここで簡単にまとめておきたいと思います。このシンポジウムのテーマは学際的な学問のつながりということですが、その前に考えて頂きたいのは、学問と



(写真 20)

いうのは必ずしも既にでき上がっているものではなくて、対象とか問題意識に由ってどんどん変化していくということです。一度つくられてしまうと、それを変化させるのは非常に難しいんですが、しかし、世の中はどんどん変わっていきますので新しい問題があらわれてくる。10年前なら学問の対象にならなかったテーマも研究対象になっていく。そういう意味では、セックスも現代では重要なテーマではないかと思います。

学問という活動は、すでに蓄積されている膨大な知識に触れ、学習することだと思えます。これを身につけて、それを応用する。しかし、その一方で、自分で切り開いていく必要がある。自分の持っている、自分自身が感じた問題意識が必要です。さらに、驚いたことや疑問に思ったこと、あるいはそれを解決したいという切実な気持ちが重要で、そういう感情に正直になってほしいと思います。そこから「なぜそうなのか」とか「一体これは何なのか」という問いが出てくると思えます。常にそういう問いを立てることが非常に大事だと思うのですが、その問いを立てるといって自体もある意味では学習の結果ではないかと思えます。単にAはBであるということ学ぶのではなく、AはBである、というのはどういうことなのかという問い立て自体を学ぶことも重要なのです。ただ、関心がないと見えてこないということもあると思えます。じゃあ、その関心は一体どこから来るのでしょうか。これは非常に難しい問いだと私は思っています。

今紹介したお祭りにしても、皆さんはどう思われたか分かりませんが、私が今までいろんな大学でこういうお祭りのビデオや写真を最初に見せて、感想を書いてもらいます。そうすると、少なくとも多くの学生たち、18、19歳の学生たちはたいへん驚きます。まず一番多く出てくる疑問は、日本で性というのはこんなに大っぴらだったのか、宗教というのはむしろ性に関係ないと思っていたけど、必ずしもそうじゃないだ、という驚きです。現代日本で、性というのはほんとうにタブーなのか。こんなお祭りが、至るところとは言いませんが、実際に行われていると考えると、日本という国は性についてどんなふうに思っているんだろうかと、今までの自分たちの考え方だけでは判断できない、そういう考え方も生まれてくるわけです。

また、このお話のはじめに、性というのはそう簡単には語れないんだと言いました。それは何故かというと、プライベートなものなのだから語れないんだとも言えると思うんです。しかし、実際はこんなふうに公にやっている。そうすると、わいせつ物陳列罪というのは一体何なのかと思うわけです。今、私は学問の名を借りて皆さんにお見せしていますが、これはわいせつ物陳列罪に当てはまらないのかとか、あるいは、このお祭り自体犯罪じゃないのかということを考える人もいるかもしれない。実際に歴史的に見れば、こういうお祭りは非常に野蛮で恥ずかしいということで廃止されていったというのも事実です。江戸時代にはもっとたくさんのこういうお祭りが各地にあったと思うんです。それがやっぱり明治維新の文明開化というスローガンの中で消えていった。こういうものを見せたらヨーロッパの人たちに恥ずかしいということで実際にはなくなっていった。

一方で、じゃあ、性に関わる祭りは何で許されているのかとなると、伝統だったらいいんじゃないのかという議論も出てくると思います。では、何で、例えばポルノはだめで伝統はいいのか。伝統だったら何でもいいのかということ必ずしもそうではない。

このように、こういうお祭を見るだけでもいろんな問いかけが生まれてくると思います。その問いかけをひとつひとつ答えるようにしていくと、いろんなことが実は分かってくるんじゃないかと考えています。

4 米兵との出会い

学問のつながりという点でいえば、もうひとつ、これらの祭りを通じて私自身の人生の中で非常に大事なつながりを感じたなと思う経験をしています。豊年祭とかかなまら祭、こういう性のお祭りで私が出会った人たちには二種類の他者がいました。ひとつは女装者なんです。もうひとつは、米兵です。あしたも田縣神社に行けば、横須賀とか座間、それから横田、少し遠くだと岩国、そういうところからたくさんの観光バスが来ています（写真21）。日本人はこういうお祭にこんな観光バスでは行かないんです。みんなどちらかと言うと密かに一人で行くわけですが、アメリカの人たちは「これぞ日本だ」と、何となく誤解していますので、観光バスを連ねてやってきます。



(写真 21)

このバスは基地の中にある旅行会社が組織するんです。こういうお祭があるからみんな行きませんか、と。彼らが使う観光バスというのは、厳密には軍隊のバスだから軍用車なんです。軍用車と言っても、実際には普通のバスと同じで、別に機関銃とかが取り付けられているわけではありません。でも、軍用車ですから、お酒を飲んだり歌ったりして騒いではいけないし、席を勝手に移動してはいけない、などの規律があると聞きました。

私は 1996 年の春に川崎のお祭りで初めて米兵と出会って、話をする機会がありました。そのとき、

米兵が非常に近く感じられました。私はこう思ったのです。私もすごく偏見にとらわれていたな、と。それはどういう意味での偏見なのかというと、いままでは、多分にマスコミの報道のせいでもあります。戦争とか犯罪とか国際関係といった政治的な文脈でしか、米兵を見てこなかった。それが、思いもかけないところでこういう人たちに会ったということです。

考えて見れば、米軍あるいは日本に住んでいる米兵について、私たちは実は何も知らないことに気づかされました。その理由は幾つもあります。例えば、私たち自身が戦後日本社会のタブー領域として軍隊というものをしている。あるいは日本人特有の軍事アレルギーということもあります。米兵、その家族、あるいは関係者は日本に10万人から11万人います。これは、実は大きな数なんです。外国人登録の対象になりませんから、彼らは日本に住んでいる外国人という形では統計上は現れてきません。彼らはヴィザをとらなくてもいいわけです。直接基地に入ってきて基地の中で住むこともできます。私たちはかれらについてほとんど知らない。もちろん知ってる人もいますけど、少なくとも私は知らなかった。



(写真 22)



(写真 23)

私は、それ以来基地というのはどんなところなんだろうかと考え始め、この10年間、基地を対象に調査もしています。ここで少し、この調査について紹介したいと思います。日本に来るときは、アメリカ兵たちは *Welcome to Japan* という冊子をもらいます(写真22)。もう一つ、*Destination Japan* という冊子があります(写真23)。これは、『目的地日本』と訳していいと思うのですが、この冊子の表紙にある地図を見るとわかりますように、沖縄が日本本土と同じくらいの大きさになっている。これは、アメリカ側から見れば、沖縄に75%の基地が集中していますから本土よりも大事、あるいは同じくらい大事だという気持ちを物語っています。

私がいろいろ基地のことを調べ始めて幾つか驚いたことがあるんですけど、すこしその話をして、また皆さんの期待しているセックスのほうに移りたいと思います。これ(写真24)は何なのかといいますと、私あてに届いた封筒です。どこから来ているかというと、英語で書いていますが、ファミリー・サービス・センター、これは米兵の家族を支援するセンターから届いています。その下に U.S.Fleet Activities, Sasebo, Japan となっています。佐世保にある海軍基地から私あてに送られた手紙なんです。ところが、この左を見ればわかりますように Air Mail となっていますね。これは非常におかしなことですよね。



(写真 24)

佐世保から送って、なぜ外国の郵便物として日本に来るのか。どうしてかといいますと、郵便物を基地内のポストに投函すると、すべてサンフランシスコに集められます。それから、サンフランシスコから日本に、この場合京都に送られます。ところが、佐世保の基地のフェンスを一步出て手紙を郵便ポストに入れば、それは普通の国内郵便になり80円で済むんです。こういう事例から基地というのは極めて奇妙な世界だということに非常に驚きました。単に米兵とは一体だれなのかとか、米兵の家族はどうしているのかというより以前に、この基地というものが非常に何か奇妙な場所なんだ、と思った次第です。

こういうことも、川崎のお祭りに行って初めて米兵と知り合えてわかってきたことなのです。

基地は閉鎖的ですが、開放的になることもあります。写真25は、岩国基地のオープンデーといいますが、基地が年に1度、一般に開放されさまざまな催し物がなされる日がありますが、そのパンフレットです。こういうときにはミッキーマウスと、ちょっと古いですが、ピカチュウとが一緒に並んでいます。

写真26は、米兵が日本に連れてくる子供たちのためのガイドブックです。その中には、割り箸の使い方が解説されていて、実際に割り箸を張りつけてあります(写真27)。



(写真 25)



(写真 26)

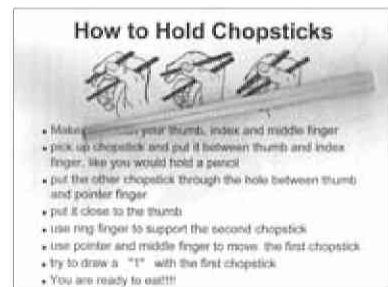
5 セックスを語る

こういうふうにして、私自身は、米兵に関しても、またセックスに関しても偏見というものをどうやって取り除いていったらいいのかについて考えさせてきました。それが学問をすることの一つの意味ではないかと思っています。ただ、偏見を実際に取り除くというのは非常に難しいので、少なくともそれを意識することが大事ではないかと思っています。

それじゃ、セックスの場合はどうなのかというと、セックスというテーマは非常に難しい。在日米軍をめぐる偏見を意識することよりもむずかしい。ただ単に私たちが恥ずかしいというだけではなくて、セックスを語る言葉、私たちが自由に語れるような言葉がまだ生み出されていないのではないかな。結局、私たちは「あれ」とか「それ」とか、そういう指示代名詞を使って日常的にも話をしている状況ではないか。こうした状況を私たちが変えていく必要があるだろうと思うのです。ただ、その場合でも、非常に難解な医学的な用語で置き換えればいいのかというと、そうでもない。一方に性科学という非常に厳格な、外から見れば少なくともきちっとしている医学の分野がある。他方に、私たちが酒を飲んだりしたら出てくるようなわい談というのがある。そのちょうど中間あたりに性の研究領域が生まれればいい、というのが私の考えるセックスへのアプローチです。そのうえでそれは、どちらに対しても批判になればいいと考えています。

性科学の方はどうしてもセックスを身体やホルモンの問題としてとらえてしまって、人の心、性に関する心の問題みたいなものはなおざりにされている。他方、わい談というのは一見楽しそうに見えますが、やっぱりそこで不愉快だと思っている人がいる。特にわい談というのは仲間とそうでない人とをむしろ分けるような、そういう機能を果たしています。昔だったら多分、男性と女性、わい談のわかる男たちとわい談に乗れない堅ぶつの女といった対立です。そういう中で、わい談を喜ぶような女性は特別視されるという図式があった。

私自身は、セックスを研究テーマに選んだ学生のころは女性のマスターベーションがすごく気になりました。自分でやるのなら、一般に性にたいして受け身とされていた女性の性への能動性が認められるからです。マスターベーションを出発点に、先ほどのお祭だとかアダルトビデオだとか、秘宝館などの調査をしました。秘宝館も先ほどの田縣神社の隣にあったのですが、もう閉鎖されてしまいました(写真28)。最近では強精剤について調



(写真 27)



(写真 28)

べています。最初、私はこの講演が名古屋で行われるということだったので、強精剤について話をするのいいのではないか、と思いました。と言いますのも、名古屋には、この世界で非常に有名な「あかひげ薬局」があります。あかひげ薬局は、1988年にできたお店で、明るく強精剤を売ろうという薬局です。この薬局の本店が名古屋ですから、強精剤の話をしようかなと思ったのですが、今回の講演会の対象が高校生だと教えられたのであきらめました。高校生に強精剤の話をしてもあまり意味がないからです。

最近では3Pとか、また、売春婦との対話などもやっています。それから、一番最近の成果としては『フェティシズム研究』という論文集ですね。これを京都大学の学術出版会から3巻企画しているんですが、1巻が最近出ました。こういうものを今、研究しています。このように、セックスというテーマは実はいろんなところに広がっていくと私は思っています。

6 3月15日——告白か誘惑か？

最後にもう一つのキーワード、3月15日の方は最初にお話しましたが、3月14日、つまりホワイトデーというのは一体何なのかということを書きたいと思います。こちらのほうが、高校生を対象にしたテーマになるでしょう。彼らの頭の中はクリスマスあたりからホワイトデーまで、恋愛モードになっているはずです。すでに述べましたように、ホワイトデーというのは、要はバレンタインデーとペアになっている日です。

では、バレンタインデーというのは一体何なのかというと日本では女性による「告白の日」です。

では、告白の反対は何なのか。告白しないことでしょうか。つまり、自分の想いを明かさなくて、沈黙するのが告白の反対なのでしょうか。私は、告白の反対は誘惑ではないかと思っているんです。誘惑というのは、一見、告白と変わらないじゃないかと思うんですが、告白というのは、まさに自分が「好きだ」と伝えて、あとはどうにでもしてください、そういう態度ですよ。だから、告白をめぐる問題というのは、告白した後ではなくて告白されるまでのゲームです。

それに対して誘惑というのは誘惑の後が問題ではないかと思っています。誘惑というのは、じゃ、どこがおもしろいのか。私は、「誘惑する」というのは非常に奇妙な動詞だと思っています。「私があなたを誘惑する」というのは何を求めているのかというと、誘惑の対象であるあなたが私を好きになってほしいとか近寄ってほしいとか、声をかけてほしいということです。ということは、主語である私と、目的語であるあなたの関係が誘惑という動詞で逆転するわけです。その意味で、実は極めて珍しい動詞ではないでしょうか。

この点について言語学者の立川健二さんは、「誘惑するとは積極的に他者に働きかけることではあるが、にもかかわらず、他者に従属した弱い立場に立つことである」と述べています（立川健二『誘惑論——言語としての主体』新曜社、1991年、39頁）。「私は弱いんだ。あなた、何とかしてくださいよ」というメッセージを投げかけている、というわけです。フランスの思想家ジーン・ボードリヤールは、「誘惑とは弱点を攻めるようにと他者に呼びかける挑発なんだ」と（宇波彰訳『誘惑の戦略』法政大学出版局、1985年、110頁）。誘惑者は他者に、これは私の言葉ですが、能動的になれと働きかける。

もうひとつ誘惑について重要なのは、誘惑というのは、要は頭ではなくて身体が問題だという点です。日本語では「口説く」という言葉があります。これは、言葉で説くという意味だと思いますけども、口説くというよりも以上に、誘惑ではしぐさが大事な意味を持ちます。セックスを研究テーマにしている私にとっては、告白より誘惑の方が非常に魅力的な言葉です。

かつて、上野千鶴子さんは、名古屋の某予備校で、たいへん有名な講演をされます（『マザコン少年の末路——男と女の未来』河合ブックレット 1、河合文化教育研究所、1986年）。そこで、彼女は子供が大人になる大きな変化のひとつは、親に秘密ができることだ、と述べています。それはどんな秘密なの

かと言いますと、性についてです。みんながみんなそうだとは言いませんが、あるときから親に性について聞くのが恥ずかしいと思い始める。また、自分の性的な経験を親に話すなんて、とんでもないと思い始める。これが大人への第一歩だと上野さんは述べています。

私の視点から言うと、子供から大人への第一歩は、告白モードから誘惑モードへと恋愛の作法を変えるときではないでしょうか。告白は少年少女たちの恋愛に欠かせません。ですが、告白は、誘惑に比べるときわめて単純でおもしろくないかけひきです。その意味で、告白モードから誘惑モードに変わった時、子供は大人になると言えるのではないのでしょうか。それはまた、恋愛関係にセックスが欠かせない世界への第一歩でもあります。

最初のテーマに戻りますが、「語れない?語りたい?」というのは、セックスについての私の気持ちだけでなく、学問的な態度を表しているとも言えます。「語りたい」というのは、私が学問として性についての言葉をつくりたい、言葉を生み出したいという意味での「語りたい」です。しかし一方で、「語れない」、あるいはもっと言えば「語りたくない」というのは、告白という形で語りたくない、という気持ちを表しています。

7 おわりに

そろそろ、まとめてみます。性の話をしながら、最後に誘惑という動詞にたどりつきました。セックスと誘惑はきっても切れない関係にあります。でもそれだけではないと思います。あらゆる領域に誘惑が潜んでいるからです。そのような領域のひとつに学問があります。繰り返しになりますが、学問というのは知識の伝達・継承に留まりません。それ以上の実践です。それはまさに誘惑です。この誘惑に皆さんもぜひ乗ってほしい。もしかしたら私のように誤った道に入って、言いわけをしているということもあるかもしれないですけども、そういうことを恐れなくて、誘惑されたり、したりすることを楽しんでほしいと思います。誘惑がおもしろいのは、主客が逆転するところだと言いました。つまり、大学で学問を行う私たちは、教師も学生も、この誘惑の世界では一方通行的な関係は存在しないということです。お互いに誘惑する（学び合う）世界こそが大学の理想ですし、その理想に近いのが研究に専念できる人たちが集う附置研究所だと思います。

以上です。ご清聴ありがとうございました。